

唱歌「ふるさと」の現代的歌詞

武内 清

(武内清 フログリ転載、

<http://www.taketchikkyoshin.com/page2/>)

首都大学の西島さんが、唱歌「ふるさと」の現代的な歌詞を、高校生に二巻かせたものが朝日新聞(6月28日、朝刊)で紹介されていた。「ふるさと」の歌詞の精きを、現代の若者が作るかどうかのようになるのか。山や川といった自然や年老いた父母ではなく、都会の喧騒やゲームやネット世界がふるさとになっていることが高校生の作った歌詞からわかる。

敬愛大学こども学科の1年生(千葉県出身者が多い)に、この新聞記事を読んでもらい、歌詞の精きを書いてもらった。そのいくつかを紹介しよう。

- ・田舎から 都会へ 方言を 共通語へ変わり 次は いつ帰ろう ああ ふるさと
- ・進学して 一人暮らし 家事料理 苦勞を感じ 毎日やってくれた 親に感謝 ふるさと
- ・自転車で 登校 授業を受けて 家帰る 毎日同じ 生活して 先の見えぬ ふるさと
- ・一度起きた 地震で 全てのが無くなる 今は風も穏やかだけど 心はまだ ふるさと
- ・埋められてく かの川 行き場なくす 魚達 海も埋められ 山も潰し どこへ行った ふるさと

今日の授業の中で、このことにかけての時間は、説明も含め最後の10分ほどだった。それでも学生からこれだけのものを引き出したのは、西島氏の考えた方法がよかつたせいであろう。

「ふるさと」授業(東京成徳大学)

東京成徳大学の授業(「青少年文化演習 1」)でも、『ふるさと』の4番の歌詞を考えてもらった。

- ・上京して3年 帰省時間は4時間 離れてわかる 地元のおさ たまに恋しい ふるさと
 - ・出会う人は知り合い 電車の中は同窓会 世間は狭いが 地は広い 終電は ふるさと
 - ・もう起きなよ 後5分 夜ご飯はまらない 飲みイベントに明け暮れて 忘れかけろ ふるさと
 - ・進む電車 満員 大学、会社 憂鬱 働くのは誰の為 道の見えない ふるさと
 - ・流れ去って 瓦礫に 捨て出し 物質 知らないふりをしても 誰のものか ふるさと
- 学生に「先生も作りなよ！」と言われ、私もはじめて作詞

・講義で 汗だく 聞いているのか 学生諸君 「うるさい」と叱ったら 皆寝てしまった 静かな
教室 ふるさと (でも、『ふるさと』の曲とまったく合わない。まーいっか)

神田外語大生の「ふるさと」

神田外語大の「教育社会」の授業でも、「ふるさと」の4番の歌詞を書く授業を実施した(これにかけた時間は10分程度)。資料は同じで、西島氏の「ふるさと」に関する新聞記事と、藤原新也の原案に関する新聞記事とである。その二つを結びつけて、歌詞を考えたいもの、関係なく日常から作ったものなど、

- ・空から降る 死の灰 目に見えぬ 影あり 大きな力で左右され 異族された、ふるさと
- ・國家に過去 命じられ 1年が経ち 再稼働 原発の悲劇 何を学んだ 変わり果てた ふるさと
- ・國も政府も疑い 安全に住めない 環境に置かれて 誰が帰りたいと思うか(いや、思わない)
- ・今も残る がれきは 忘れられぬ 記憶に みんなの支援が 広がって 早く元の ふるさとへ
- ・皆一緒 安心 放射能に負けない 協力大切 してみる 忘れがたき ふるさと
- ・地震の中 辛くとも 決して崩さぬ 平常心 ひたすら外人は 驚くばかり 見返したぞ 日本人
- ・普通の日々 奪われても 生きる希望なくとも それでも僕らはまだ生きている よみがえれ 僕らのふるさと

- ・家族が待つ 我が家 友が待つ 我が場所 心温まる 自分の居場所 心安らぐ ふるさと
- ・電話越しから 母の声 元気ですかと 心配する そんな優しさ 心に染み ぶと帰りがたくなる ふるさと
- ・友と遊び かの海 家族と話し かの家 離れていても 心を 支えてくれる ふるさと
- ・みんなな都会に 出て行き 昔の暮らしを 忘れる それはとても悲しい 忘れないで ふるさと
- ・風情れない風景 知らない顔 満員電車 都会を感じる 時折来る 両親からの電話 帰りたい ふるさと
- ・都会の波にもまれて 先の見えぬ この国 いつかの 成功を 夢見て ああ懐かしき 我がふるさと

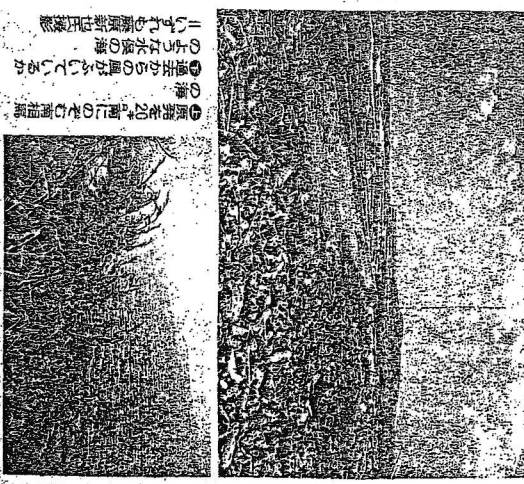
- ・隣近所 見知らぬ コミュニケーション 取りがたい 交流大事と知っていても 周りに 知り合い いない
- ・社会通念 守って 自己実現 果たせぬ 競争社会 敗れて 生きる意味なし ふるさと
- ・田んぼ 畑 広がる のどかに暮らす 私の町 不便で 都会に あこがれて 引っ越したい ふるさと
- ・志を なくして 働かずに 遊んで いつかはやると 言い續けて 親に頼る ふるさと
- ・親も祖父母ももういず 友は皆嫌いだ 取り残され ひどい身 何のための ふるさと
- ・時に追われる毎日 日々溜めこむ ストレス 帰宅しても 一人ぼっち どこにもない ふるさと
- ・顔も知らぬ 隣人 外に出れば デンジョン 隣の街も 似た風景 どこでもいいや ふるさと

私たちは国土と民を失った

藤原 新也

作家

ふじわら・シムヤ 1944年
福岡県門司市(現・北九州市)生まれ。作家、写真家。著書に『東京漂流』近著に作家白木和道子さんとの対談集『なみだふるはな』。



水俣病そして原発事故

「3.11」以後、あんなに水俣病が言われている。健康被害もさることながら、生態系や農畜産物の汚染も深刻だ。水俣病は、金属のついでに、有機水銀の汚染も深刻だ。水俣病は、金属のついでに、有機水銀の汚染も深刻だ。水俣病は、金属のついでに、有機水銀の汚染も深刻だ。

政治生命かけるべきものは

水俣病は、金属のついでに、有機水銀の汚染も深刻だ。水俣病は、金属のついでに、有機水銀の汚染も深刻だ。水俣病は、金属のついでに、有機水銀の汚染も深刻だ。水俣病は、金属のついでに、有機水銀の汚染も深刻だ。水俣病は、金属のついでに、有機水銀の汚染も深刻だ。

不安定な心、ありどころのないまま、移り変わるふるさと。いつもそばにふるさと、無意味な日々、ただ生き、志を果たせず、静れないよ。ふるさと、もう忘れたい。ふるさと、高いビルとマンション、木々の森が見えない、環境問題、尽きないだろう。未来が不安、ふるさと、未来暗き若者、予測できぬ事ばかり、毎日疲れて、嫌になる。一体何がふるさと、日本人は、行き詰まり、せかせか働いて、余裕がない、アメリカに帰り、自由に時間を、使いたい。ふるさと、時間が無い、忙しい、寝る時間も、削って、でもそれは自分で作るもの、余裕を持って、生きましょう。

スマートフォン、欠かせない、SNS、つぶやく、友との繋がりが、メールだけ、メールの世界、ふるさと、ネットのウラ広がる、友人作る、ネット上で、コミュニケーション、取れない、先が怖い、ふるさと、返事が遅い、イライラ、課題が多い、しょうがない、人付き合い、面倒くさい、ケータイなくなれ、世の中、

西島氏からのメール

第34回 東書教育賞

入賞論文

未来を担う子どもと共に歩む
 確かな教育実践

「総合的な学習」から「社会的に開かれた教育課程」の実現を

熊本市立吉東小学校
 田山 雅博

1 研究主題について 【何ができるようになるか】

これからの未来を生きる子どもたちには、刻々と変化する社会環境の中で、他者と協働しながら自ら考え、判断し、適切に対応し、よりよい生活を楽しんでいる子どもたちになってほしい。そのために、主体的・対話的で深い学びの視点からの学習改善を求めるのは必至である。本研究では、6年生の総合的な学習の時間を中心として、「熊本地震復興数え歌をつくらう」という単元を進めていった。よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を共有し、学校外の社会とも連携・協働しながら、学校の創り手となるために必要な資質・能力を育む「社会的に開かれた教育課程」の実現を、まずは「総合的な学習の時間」で目指し、本研究主題を設定することとした。

2 副題 「熊本地震復興数え歌」づくりへの思い ～「はじめに」に代えて～ 【何を学ぶか】

本研究は、平成29年度日吉東小6年生の総合的な学習の時間「熊本地震復興数え歌をつくらう」の実践をまとめたものである。彼らが6年生となった平成29年4月は、熊本地震から1年が経ったときであった。児童は、熊本地震をはじめ、復興が道半ばのところがあること、またそのときもお仮設住宅に住んでおられる人たちが

がいっしょにやることも知っていた。そして地震当時は本年の児童も含めて、本校では数百人の方々が避難生活をされていた。それにもかかわらず、すでに児童の周りでは、熊本地震のことが話題にのぼることはなく、記憶の風化が感じられた。

学校における避難所が閉じられ、少しずつ復興が進む状況下で、熊本地震について児童がもてる力を出して、主体的な学びをどのように構築していったらよいか、と悩み模索しながら、4月に学びのスタートを切った。

そのような中で出会ったのが、年度当初熊本日新聞に掲載されていたある記事であった。「数え歌」で震災伝承」という見出しのそれは、明治22年の熊本地震の際、当時の様子が数え歌にされた資料を、熊本県立大学大島准教授が発見されたという記事であった。民衆が災害を伝え、記憶する手法として数え歌が用いられていた事実を知り、6年生児童にこの記事を紹介したことから、この研究はスタートした。大島准教授が発見されたその数え歌の歌詞には、東北なまりの表現が見られ、災害を語る数え歌が、東日本大震災で被害の大きかった東北地方にまで広がっていたことに運命的なことを感じた6年生児童に、「私たちが、平成の熊本地震を伝える数え歌をつくりたい」との思いが生じたのである。

本研究は、熊本地震の数え歌をつくらうことを

通して、平成の熊本地震のことを後世に伝え、記憶を風化させないための歴史・文化の継承者（未来の創り手）として、社会参加・社会貢献する児童を育てることをねらいとした。この研究・単元では、熊本地震の記憶をつなげていきたるに向けて、熊本地震の記憶を大切にし、そして、「い」との児童の思いを大切にしたい。そして、この学びで完結することなく、今後の児童の人生で、突然に起こるかもしれない災害時に生き残るものとして、今回の地震によって、明治の熊本地震のことを、ほとんどの熊本県民が知らなかったことが報道等でも明らかになったが、児童の創作した数え歌を広く公開していくことで、平成の熊本地震が決して風化することなく、今後の大地震の際に生きる一助ともなるよう、研究を進めることとした。

3 研究の内容 【どのように学ぶか】

(1) 研究の仮説
 「主体的・対話的で深い学び」の視点から授業に、「学校外の社会との連携・協働」を重ねて「総合的な学習の時間」の授業を構築していくことで、「社会的に開かれた教育課程」が実現するのではないか。

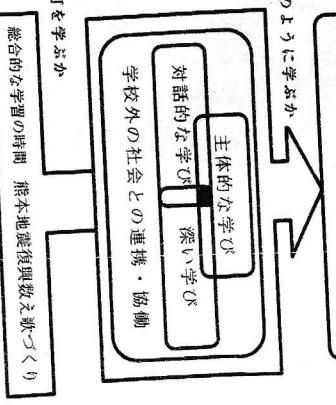
(2) 研究の中心

- ① 主体的な学びとなる工夫
- ② 対話的な学びとなる工夫
- ③ 深い学びとなる工夫
- ④ 学校外の社会との連携・協働の工夫

(3) 研究の具体的方策

- ① 主体的な学びとなる工夫について
 - ア 児童の学びの意欲を高める出会い
 - イ 学びが見え、継続できる評価
- ② 対話的な学びとなる工夫について
 - ア 外部の人材、先哲の考え方の活用
 - イ 児童の対話の積極的な促し
 - ③ 深い学びとなる工夫について
 - ア 思考ツールの効果的な活用

社会的に開かれた教育課程



4 研究の実際

- C 明治時代にも、大きな地震があったんだ。
- C そのときも熊本城が大きく壊れていたんだ。
- C 大島先生の話をぜひ聞いてみたいな。そして私たちも数え歌をつくりたいな。先生、何とかお願いしますか。
- C もし私たちがつくったら、避難所の経験も数え歌で知らせたいな。
- C テレビに取材してもらったらいいんじゃない？



写真① 明治の熊本地震の際につくられた数え歌

写真投影法 2

投稿日: 2015年11月24日 作成者: takayuchi

今日の(2015年11月24日)の教職概論は、写真投影法を説明した。

学生が、教員になった時、この手法を使えると思った為である。

最初に、今日の課題として、「大学内で気に入っている場面、あるいはひと、もの等の写真を撮ったと想像してその絵を描き、それにコメントをつけて下さい」(コメントの長さは自由20~100字くらい)という指示を出した。

本当は写真でできればいいのだが、時間も、機材もないので、簡便な方法をとった。(もしかしたら、スマホで写真を撮り、それを持ってきてもらえば、それを投影し、情報を共有できるのかもしれないと、後で思った)

次に、NHKの藤原新也の授業を、you tubeから見てもらい、感想を求め、それも参考にしてもらった。

写真投影法に関しては、下記の資料を配り、説明した。

受講生からは、かなり、面白い写真(絵)やコメントがあった。

配付資料

写真投影法 1 (出典<http://applumeria.me/blog/20131204/>)

まず始めに「あなたの人生において大切なもの」というテーマで写真に撮ってくださいと伝えるところから始まります。撮ってきてもらった写真をもとになぜその写真を選んだのかということを書いていきます。写真というところがとてもユニークなポイントです。これは写真投影法と呼ばれるものです。心理学の分野では、心の中を言語化することで、分析であったり、カウンセリングが行われてきました。ただしその言語化する過程の中で失われてしまう情報があるのではないかと考えることもあります。そうした考えから生まれたのが、描画法というものや箱庭療法になります。描画法では実際に絵を描いて表現してもらい、そこから分析を行っていく手法になります。その時々でテーマを与えられるのですが、「自分を描いてみてください」などといった指示をして絵を描いてもらいます。箱庭療法では、砂の入った木箱に準備したミニチュアを好きなように配置をして、自分の世界を表現してもらいます。どちらの方法も表現したあとに言語化されることがあります。描画法や箱庭療法では絵の上手い下手や、ミニチュアの制限、時間的制限がともなわれています。写真投影法はそれに次ぐ方法として、京都造形芸術大学の野田教授が1988年に考案した手法であり「写真による環境世界の投影的分析法」のことです。近年カメラの性能が良くなってきたことで、表現がしやすくなり、また絵の上手い下手や、時間的な制限を受けることなく心の中にあるものをビジュアルで表現できるとことが利点です。僕の研究ではこの写真投影法を使って50人に「人生において大切なもの」の写真を選んできてもらっています。

写真投影法 2 (出典http://www.kwansei.ac.jp/s_sociology/attached/6324_52317_ref.pdf)

写真投影法 (Photo Projective Method: PPM) とは、写真による環境世界の投影的分析法である(野田正彰『漂白される子供たち』情報センター出版局、1988)。この方法では、調査対象者にカメラを渡し、何らかの指示を与えて写真を撮らせる。そして写真に撮られたものを、自己と外界との関わりとの反映と見なし、認知された環境(外)と個人の心理的世界(内)を把握、理解しようとする方法である。PPMは、環境学や地理学、心理学などの学問領域で注目されている。これは、これまで言語レベルでの測定によってしか知りえなかった撮影者の視覚的世界や心理的世界が、写真という視覚的データを介して垣間見られるからである。写真調査の指示-レンズ付きフィルムを渡し、「〇〇大学での1週間をこのカメラで撮影してください」と指示を与えた。写真ごとに、「何(を行っているところ)を撮影したのか」、「その時にどのように感情をもったのか」について記述するよう求めた。



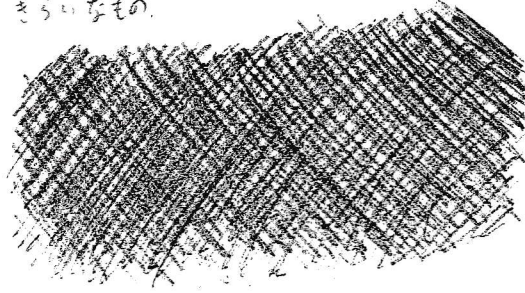
IMG_20151124_0002

1 前回のリアクションを読んだ感想

先生のリーダーシップによって、その学級の学力やいじめなどが増えたり減ったりすることを知られた。

2 何か、自分の好きなもの、あるいは嫌いなもの写真を撮ったとして、それを絵にして、書いてください。それに説明も加えてください。

きらいなもの



自分が探しているものはその暗闇にあるのだろうか。

暗闇 ... いろいろな想像が湧いてしまうから。

好きなもの



自分の人生において一番大切なもの。

3 藤原新也「課外授業」をみての感想

ひとつひとつの言葉にもものすごく考えさせられた

目と足で写真を撮る。頭は使わない。きらいなものを撮ることは難しい。きらいなものを写真を撮り、それを見直すと新しい感情が生まれることが「なるほど」と思った。小栗将也先生のときに、生と死について考えることはとても大切なことだと思った。一度撮った写真に言葉をつけたことでその写真にどう思っているのか

2 何か、自分の好きなもの、あるいは嫌いなもの写真を撮ったとして、それを絵にして、書いてください。それに説明も加えてください。

小学校くらいに行っていた鴨川に川下舟を漕ぎながら泳いだ。泳ぎの身体に刺さって後、水の中を速度を落とさず泳ぎながら泳ぐのが強さを感じた。あの時、シートに行かぬために興味を持っていたと思う。泳いでいる川下舟に泳いでいる状態が泳ぐとは違う通力があり、履鞋で泳いだりした泳ぎと見ているとは違って最近では見ることができないので是非鴨川を訪れて泳ぐ姿を見たい。絵にしたのは一番衝撃を受けた、泳ぐの最中水中から飛び上がった瞬間、力強さややかさを鮮明に覚えている。



好きなもの: 泳ぎ 嫌いなもの: 虫
理由: 思い浮かんだから 理由: 虫の描きやすかった。



3 藤原新也「課外授業」をみての感想

嫌いなものを撮るというのは面白いと思った。「嫌」というのも様々な理由があった。(怖い、疲れる、気持ち悪い、かわい...) 学校の授業にあってはめさうとするなら道徳? 想像力を主に使うと思う。私は嫌いなものを残すのは難しいと思う。

4 他の人にリアクションを読んでもらいコメントをもらう。

() さん) → 好きなものについて書いてあるのがその子にとってはとても思わされた。